第３回　（仮称）伊賀市観光振興ビジョン策定検討委員会　議事要旨

■日　時：令和３年８月 24 日（火）14:00～17:00

■場　所：**ゆめテクノ伊賀３階　テクノホール**

■出席者：　※敬称略、OL：オンライン対応

〔委員〕木根 英男（OL）、浅野 正嗣、山口 真由子、柳生 厚義（OL）、松田 美紀、三橋 源一、榊 太基（OL）、池澤 良武、中川 智仁（OL）、神田 昌典、西川 裕介（OL）、佐野 裕子（OL）、勝原 みどり／オブザーバー　日本航空 鈴木氏（OL）

〔事務局〕伊賀市観光戦略課 川部 千佳、辻本 康文、猪口 陽平、菊田 翔、㈱イマイシス 多久和 敦志（OL）、㈱テイコク 南 雅（OL）

■議　事：

１．挨拶

２．第２回ディスカッションのまとめ

３．委員プレゼンテーション・ディスカッション①

㈱NOTE 伊賀上野　西川 裕介 委員

― 休憩 ―

４．委員プレゼンテーション・ディスカッション②

共衛　三橋 源一 委員

― 休憩 ―

５．「なぜ観光が必要か」

多久和氏

６．その他

…　次回：事務局で調整の上、案内

■委員プレゼンテーション・ディスカッション①／西川 委員

・事業概要は、古民家を活用し、建物を残すというまちづくりの観点とそれらを使った持続可能なビジネスを展開、コンセプトは「なつかしくてあたらしい日本の暮らしをつくる」

・古い街の構造を一体化・再構成するという方法ではなく、歴史的資源である古民家を活かし分散型で街なかを開発し、地域性を活かし町の規模に合った開発を行うことで街歩きを誘発するなどして魅力を創出する。

・官民連携により、行政の課題である空き家対策と民間の課題としての参入障壁等を解決し、現在伊賀市では空き家を活用した宿泊施設、レストランを展開している。

・今後も客室を増やす、地域の特色に合った店舗を作る等の開発を行っていく予定。

・地域に根を張ったプレイヤーと手を組み、地域の資源・資本・事業者を活用し、街並みを壊さずに外からお越しいただく方に地域を楽しんでいただくことで、交流人口を増やし地

域を次世代につなげていくことが「まちづくり」につながっていくと考えている。

〔ディスカッション・要旨〕

木根委員　：NIPPONIA のコンセプトについて、観光に来られる方にこういった形で「ここに来てよかった」と思われるコンテンツをたくさん作っていければと思うし、地域の方も街中を歩いて楽しいと思えるまちづくりをしていければと思う。
今後の計画として、客室数はどの程度まで増やしていく予定なのか。

西川委員　：20～30 室を想定している。まずは経営の安定化を図るために客室を優先しているが、同時に、魅力的な店舗の増加も地域からは期待されており時間はかかるかもしれないが、客室以外にも着手していきたい。

柳生委員　：弊社のビジネスモデルとは全く異なる観光のあり方で興味深く聞かせてもらった。今までの日本的な観光は例えば、温泉や食事といった観光客が求めるコンテンツがあってこそであったが、町に溶け込んだ取り組みであり斬新であると思う。ちなみに、1 棟当たりの客室は 3～4 室で 1 泊 2 食の提供が主なプランとなるのか。また、客室に風呂はあるか。

西川委員　：宿泊プランは、選択制で提供している。温泉地では事業を行っていないため、客室に少し大きな桧の浴室を設けている。

柳生委員　：地域の飲食店等に営業時間の延長等の働きかけを行うことで、満足度が上がることも期待されそうである。

榊委員　　：地域に寄り添ったものであり、非常に共感できる事業モデル。丹波篠山では、地域の人たちとともに滞在環境を整備していったと聞いているが、伊賀市では今後、地域の人たちをどのように巻き込んで事業展開を進められるのか。篠山のモデルを踏まえ、市内の里山地域におけるコラボ事業の展開等を考えているのか。

西川委員　：現状では、伊賀組み紐等の体験プログラムを１，２個程度しか提供できていないが、開業 1 年が経過したこともあり、地域の事業者等との連携を拡充していきたい。2～3 年程度は、上野市街を中心とした事業をモデルケースとして集中して行っていく。その後に市内の魅力的な地域への展開を検討していきたいが、大事なことは、地域に弊社が受け入れられ、共に取り組んでいただけるか。伊賀市の里山地域には、移住者もおり、店舗展開や民泊事業者等もみられると聞いている。プレイヤーが自然発生する状態であれば、弊社が急いで進出するタイミングにはないのかとも考えており、むしろ、上野市街での事業展開に当面は注力したい。

榊委員　　：コロナ禍の事業への影響は。

西川委員　：結果的には、客室の分散や古い建物の高い換気性能もあり、さほどの影響もな

く、それなりの成果を上げている。

中川委員　：町の人たちとの連携にあたり、例えば、伊賀上野城の樹木の剪定など、スキルを持った地域の高齢者等の人材を集めて清掃活動を実施するなど、こうした取り組みから地域人材のリーダーとなる人たちとの連携関係を構築していかれてはどうか。

西川委員　：地域雇用の観点でいえば、現在、運営会社であるバリュー・マネジメントのほうで10名程度の市民を雇用している。

佐野委員　：西川委員の事業は、地域の人たちと共に育む地域循環モデルといえる。地域の良さを所縁のある人たちを含めて事業展開を図ることで来訪者への相乗効果が生まれるのではないか。宿泊のメイン層となるのはどのような方々か、遠方から来られるのか。

西川委員　：現状遠出がしづらいということと、伊賀の恵まれた立地もあってか、大阪や京都、奈良、愛知といった概ね1時間圏内の方がお越しになる。特に、30～40歳代の女性グループと３世代で来られる方に分かれる。３世代で来られる方の上の世代の方にとっては何の変哲もない建物であるが、孫世代には新鮮に映るようで世代間コミュニケーションが生まれるため好まれているのかと思う。

佐野委員　：情報発信手法は、どのようにしているのか

西川委員　：ＷＥＢ媒体を中心に行っている。弊社の顧客層は、文化レベルが高く、自らが積極的に情報収集しているようである。

勝原委員　：施設利用者の滞在中の行動は、どのようなものか。

西川委員　：現状（コロナ禍）では客室でゆっくりされる方が多いが、感染状況が比較的緩やかな時期は城の周りや伊賀焼の長谷園に行かれた方もいた。

勝原委員　：移動はどのような手段を使われていたか。

西川委員　：ほとんどが車移動である。

浅野委員　：町家の空き家化や取り壊し等で街並みの変化を寂しく感じていた。
伊賀は観光の滞在時間が短いが、まち独自の魅力創出にあたり、どのような店舗があったらいいと考えるか。

西川委員　：街中においてコロナ禍以前から20:00以前に閉店する店が多い中で、宿泊事業者としては、夜の時間を楽しめる、派手ではなくても「忍者バー」のような飲食店やゆっくりと読書ができるカフェなど、酒が飲めなくても夜の時間を楽しめるような店が増えていけばうれしい。
住宅街に立地するため地域の方とのバランスも重要と考える。

池澤委員　：西川委員の事業は、良い事業であるとの評価も聞いている。スタッフレベルだけでなく、宿泊するルームメイトのレベルも高いと聞いている。ただ、伊賀には泊っても街歩きをするしくみがなく、これは市民で考えるべきだと思う。弊社では、シェアハウスの利用者が入浴にくるが、その際に伊賀の歴史の話を話

ったりしている。夜間のコンテンツ提供という意味では協力ができる。夜間の街なか滞在等にあたっては、タクシーの運行頻度がほとんどないことも改善すべき点である。こうした改善点が克服されると観光客等の利便性も高まるのではないか。

三橋委員　：私は、日本遺産のガイド育成にも取り組んでいるが、こうした取り組みとの連携等は考えているか。

西川委員　：弊社の客層の文化レベルが高い中、伊賀の歴史を楽しんでもらうため、ガイドとの連携は、相関性が高いと考えられる。お城周辺の語り部の方ともコミュニケーションは取っているようで、コロナ禍が明ければ、ガイドとの連携プログラムも検討していきたい。

山口委員　：NIPPONIA ホテルの事業スタッフの方がカメラを持って街中を散策されていたり、伊賀に馴染もうとする姿勢は高く評価でき、今後も継続して事業を進めてほしい。

松田委員　：地元の宿泊客は少ないと思うが、宿泊もしくはレストランの地元客の利用状況はどうか。

西川委員　：伊賀の歴史に触れてもらうというコンセプトで、伊賀の方にとっては非日常を味わう施設ではないこともあり、地元客の利用はかなり珍しいとは思う。

神田委員長：NIPPONIA ホテルの他地域における取組状況と比べて伊賀の良いところと課題は、どのように考えられるか。

西川委員　：伊賀は、他の地域と比較して都会である。丹波篠山については人口 4 万人程度。伊賀市は、立地環境や全国的な知名度の高さ、産業も立地しており、ある意味で恵まれた地域のため、市民のまちづくり意識がそこまで高くないと住民の方と話す中で感じている。

神田委員長：伊賀は、よそ者を受け入れにくい土地柄といわれるが。

西川委員　：感じるが全国のどこでも同じである。特に、歴史があるまちはよそ者嫌いであり、伊賀が特別というわけではない。

― 休憩 ―

〔西川委員のプレゼン・まとめ〕

事務局　　：プレゼンの視点としては①保存と活用のバランス、②まちあるきの誘発、③なつかしくて、新しい、④次の世代への継承の４点がキーワードだった。

NIPPONIA ホテルのビジネスモデルは歴史的建造物の保存・活用を通じ地域のプレーヤーが地域の資源に新しい価値をづけを行い、地域のヒトモノカネの循環を促進させ、資源を次の世代に引き継ぐというもの。

それに対して委員の皆さんからの意見として、下記のものがあった。

・観光客が来てよかったなと感じる、喜ぶためには？どうすべきかという視点が基本
・NIPPONIA の今後の展開は？

⇒20～30 室、客室だけではなく、飲食・体験などのコンテンツを増やしていきたい。
・温泉や食事などコンテンツがあっての観光という視点ではなく、街に溶け込んでいる観光という新しい観光の視点である。
⇒食事とお風呂は重要なので、施設内での機能を充実させている。
・宿泊の方の滞在時間を延伸、満足度を向上させるための地域への取り組みが重要、そのために必要なコンテンツは？
⇒夜間コンテンツ（バー、お酒が飲めない人でも楽しめる施設）
伊賀のその他の地域（中山間地）への展開の可能性は？
⇒旧町村より中心市街地の方がネガティブ

事務局　：西川委員のプレゼンで、里山地域よりも、上野市街地のほうが事業参入等に消極的というような話があったが、改めて認識について伺いたい。

西川委員　：旧町村エリアでは移住者の増加や評価の高い店舗ができている等聞いている。反対に中心市街地では浄化槽の設置や敷地の余裕のなさなど、店舗としての入りやすさや住民としての移住のしやすさなどのハードルは高く、弊社として空き家活用による事業展開に取り組むべきと考えている。

事務局　：意見全体を以下のとおり整理した。課題という認識で確認をお願いしたい。

○地域の人との関わり方
１．特に時間や知識・技術のある方との連携（ボランティア活動など）
２．お金をかけずに人を動かす方法
３．市民の意識（危機意識）の醸成

○滞在時間の延伸・満足度の向上のために
１．必要なコンテンツ（伊賀に足りないもの）⇒夜間コンテンツ（バーなど）
２．移動手段

事務局　：これらを踏まえ、まとめにつながる内容として委員に下記の質問をさせていただきたい。

① 歴史的建築物以外の活用できる地域資源は？
② 地域プレイヤーの発掘・育成には何が必要？
③ 次代へのまちづくり継承は、誰が、どのようにすべきか？

池澤委員　：②について、視点を下げて楽しいアイディアを広げる場所があることが大事。③は良いものがあれば、自然に引き継がれていくものと考えている。今は何も

ないから引き継げるものがないだけだと考える。

浅野委員　：②は、伊賀で生まれ育った方限定で考えると視野が狭くなってしまうが、私のような移住者について、間口をもっと広く取って地元の受入体制を整えことが重要。

■委員プレゼンテーション・ディスカッション②／三橋 委員

・里山地域における自身の移住、民泊事業体験等を通じた、里山に住んでいる側からの持続可能な地域づくりについて。
・半Ｘで民泊をやりながら三重大学の博士課程での研究や忍術道場等を営んでいる。
・コロナ禍を経た観光動向から、これまでの観光のやり方では様々な課題が生まれており、新しい観光施策が求められている。
・観光客側もコロナ禍や災害時において都市部の利便性に疑問を持ち始めている等、世情を踏まえた変化がみられる。
・求められる新しい観光として、現地集合の着地型、集約型の旅行ではなくオフに歴史・風習を楽しむ「気づき」旅行、「遊ぶ」から「学ぶ」へ、「イベント」から「伝統行事」へ、移住しないが滞在して伝統を学ぶ「試住の旅」、現地ナビゲーターと連携し地域を学ぶ旅などが求められており、旅行客が「旅行業界」より「地域住民」とのつながりを求め、自分の新たな「住み方」を探す旅を求めはじめている。
・伊賀は歴史的に見ると持続可能な開発を体現した地域で、ＳＤＧｓ観光を受容する滞在性が高い地域。ただ、観光業界がそれに気づいていないのは、文章ではなく技能・作法に息づいているそれに目を向けていないから。
・「仕事」と「稼ぎ」の概念から、現代人は人生経営の為の「稼ぎ」が第一となってしまっており、持続的な地域とするには地域で「仕事」を体現することが必要。
・持続可能な地域づくりのためにはこれからの地域をどう作るかを考えて、地域のプラスになる関わり方のできる観光客に制限、選定することが必要となる。
・これからの生活スタイルのヒントを探る観光は、ＳＤＧｓ の模範となる学びの旅であり、観光客がより地域に近づくことが必要。観光業のために地域を演出するのではなく、地域における生き方をどう観光客に伝えていくかが課題。

〔ディスカッション・要旨〕

西川委員　：お客様にとって伊賀における宿泊そのものが、地域資源の保全につながっている弊社の事業モデルと共感する点が多い。こうした視点を観光客にどのように訴求するかが課題である。

木根委員　：旅行者が多様化する中、観光を経済的視点から捉える以外の視点があることは勉強になった。夜間のサービス提供についても従業員にお願いするのが難し

い状況。顕在化している観光客のニーズも重要であるが、自分たちが提供する側として続けていける価値の提供について考えることの重要性を実感した。

三橋委員　:私も住民とのやり取りで気付いていったこと。もともとは「観光を教えてやる」という意識があったが、最終的には住んでいる人が「良い」と思うかどうか。

神田委員長:私は、これまで市外に観光客を送り出す、依存型の観光業が当然と考えてきた。観光業の在り方について、大手事業者にいかに理解してもらえるかが重要。観光業界の収入レベルの低さやコンプライアンス、様々な法規制等に縛られる現状では、観光客の安全・安心を確保する等のリスク対応を含め、観光ビジネスを進めるうえで支障が多いようにも感じた。地域の中で、どのように観光事業を進めるかに注目したところである。

三橋委員　:以前、地元住民の方から、4～5 年で担当が変わる旅行事業者とは付き合えないという声を聞いた。私が地域で事業を始めた時、地元の人から骨を埋める覚悟を問われた。地域としては短いスパンで稼ぐという考え方より子の代、孫の代まで良い環境を残すかが重要。5 年くらい先を目指して時間軸を長く取って地域の魅力や人との関わり方などを考えていくことが必要。

池澤委員　:観光には宿泊などに関する施設も重要であるが、施設とそれに紐づく歴史・文化をいかに橋渡ししていくかが重要となる。

三橋委員　:エージェントの役割は、地域の魅力をいかに言語化できるかにある。

中川委員　:10 年後のビジョンと過程、実現した場合の利益を市長が分かり易く市民に伝えることで市民の行動につながるのではないか。付加価値の高い商品でお金を稼ぐことが産業面で後継者の育成にもつながる。

三橋委員　:伊賀では、新しいことが成功した後で地元の人が追随するようなところが見受けられる。一番良いのは移住者や新しく住み始めた人が新しいことを始めて、それを広げていくのがいい。市民は強い権限に強いられるのを嫌うため、地域のことは地域で決められるような政策も行っていく必要がある。

中川委員　:先ほどの市長発信の意図は、トップの発信が市民の意識啓発につながり易いのではないかという点にある。

榊委員　　:三橋委員のプレゼンは、地域の暮らし方について、観光視点だけではない、根源的なプレゼンであったと認識している。その点で、短期間に伊賀の暮らしを伝える手法がないものか。

三橋委員　:短期的なプログラムとして伊賀焼の土鍋で自ら刈った伊賀米を食べるものやもち米の藁をつかった草鞋を編んでその草鞋で忍術稽古をしたり、また田植えに忍者稽古を取り入れるなど、季節に応じたプログラムを検討しているところである。

― 休憩 ―

〔三橋委員のプレゼン・まとめ〕

事務局　　：プレゼンの視点としては①観光客の志向の変化・多様性、②脱ビジネス志向、③「仕事」の延長線上に「稼ぎ」がある、④「頭脳・文章」ではなく「技能・作法」による伝承の４点がキーワードだった。
その中で、委員の意見については下記の視点があった。

１．「新しい観光」におけるコンテンツの提供方法
　①　サービス（価値）提供のあり方
　　・売り手視点か、買い手視点か
　　・労働体制
　②　「生活の一部」としての提供（稼ぎと仕事の融合）
　③　コンプライアンスの課題（旅行に求める安心・安全）

２．エージェントの役割
　①　地域の「言語化」
　②　コンプライアンス遵守「安全な旅行」

３．メッセージの発信（共感）
　①　地域住民への発信（誰が？）
　②　共感できる旅行者への発信（どのように？）

神田委員長：今回の２本のプレゼンを今後、いかに行動に移し継続させるかが重要である。

■「なぜ観光が必要か」／多久和　氏

・「経済軸」として捉えた場合、分かりやすい効果として直接的な消費が増大することで地域における流通、雇用や税収の増大が見込まれる。伊賀市の観光ポテンシャルは低くなく、観光からの産業派生効果も期待される。
・昨今の企業経営において地域とのかかわり方が問われる時代では「地域の魅力度の高さ」やその向上のための取り組みは企業誘致を行う際にも重要な視点となる。
・観光が多様化する中で、滞在時間がより長く、地域との関わりを深くするツーリズムの在り方が求められていくなかで、どのようなツーリズム・地域循環を作っていくかで伊賀市における経済効果はまだまだ伸びる可能性がある。
・「地域に魅力がないなら」という逆説的な視点で捉えた場合、市民による愛着や誇りの醸成はかなわない。市民の気持ちを前向きにするためにこそ、地域の魅力を発信し他者からの評価を得ることが重要。
・「社会軸」でみると、地方への移住者に対してのアンケートにおいて約半数が観光で訪れた地域の印象から移住地域を決定したという結果がある。観光における印象が将来的な移住・定住に寄与することがデータとして示されている。また、若年層の地方への移住

ニーズが高まってきており、地域の魅力に共感してもらう必要がある。観光そのものを目的とするのではなく、地域の魅力を高めてプラスの価値を得る、その効果的な手段のひとつとして、観光を位置付けることは有効と考えられる。

・以上を踏まえ、「効果視点」の概念図から、観光は相乗的に魅力をプラスする最適な手段であると言える。そういう意味では総合魅力度が KGI として相応しいと考える。「誰トク」を意識し、不易流行の観点から総合的に魅力度を高めていく。その中で、経済×シビックプライド×将来の定住の算式で伊賀らしさの創出、再形成、再構築を図るためにどうするかを考えていくことが重要。理想的な「三方よし」の観光循環イメージを地域の魅力度の相乗効果と捉え、三位一体でそれぞれの役割を担い取り組んでいくことが必要。

〔ディスカッション・要旨〕

勝原委員　：観光視点からみた相乗効果のイメージは理解しやすいと感じられた。自分たちが住んでいる地域の魅力を感じ、発信できることが大事であると思った。

多久和氏　：各自の立場で自分がどのポジションにいるのか、なおかつ全体最適について考えていただければと思う。

三橋委員　：３つの輪に、地域の価値を学術的に評価し発信する、輪を加えることも伊賀市らしい取り組みの概念図となりそうである。地域にあるがそれを知る手立てがなくなっている場合もあり、それを学術的にサポートできる三重大学がある。

多久和氏　：本概念図をもとにしたフレームワークを、皆さんに色付けしていただくことを期待したい。

木根委員　：観光振興に関する全体像が理解できた。ここから具体的な取り組みを考えていくにあたりこの概念図に則って、たくさんアイディアを出していくことかなと思う。

神田委員長：今後の観光振興においてはＤＭＯの運営が中心となるが、関係事業者との連携体制の構築が重要と考えている。

事務局　：観光ニーズは多様化しており、地域を学ぶことが暮らしを見直し、ひいてはコミュニティを持続させることにもつながるものと考えている。本日の協議内容をＤＭＯやＤＭＣの機能、役割にいかにつなげるかも意識しつつ、今後の検討を進めていきたい。

神田委員長：次回は、10 月頃に開催を予定し、日程は事務局にて調整をお願いしたい。本日は、長時間の協議をいただき、ありがとうございました。

以上